

資料

コロナ禍でマスク生活をもたらす幼児教育への影響

— コロナ禍でもよりよい保育をめざして —

園田晃子¹・増本利信The impact of wearing mask on early childhood education during the coronavirus pandemic
— Aiming for better childcare even during the coronavirus pandemic —

Akiko SONODA, Toshinobu MASUMOTO

〔要約〕本研究は、コロナ禍の保育活動における課題や工夫及び園児の社会的スキルの傾向について幼稚園教諭と保育教諭（以下教諭）を対象とした質問紙調査により意見を収集し検討をした。マスク保育による影響として、表情読み取りや発話聞き取りの難しさ、スキンシップの減少、さらに保育者の言葉が伝わっているか不安があることが挙げられた。それに対し現場の教諭は、教諭間や教諭園児間の理解を双方で確認したり、板書を活用するなど視覚的な情報提示を心がけるなどしたり、さらに身振りを大きくしてわかりやすくする、手を繋ぐときには玩具を介したりするなどの対応をしていることが挙げられた。園児の社会的スキルの傾向としては自己統制行動の弱さや不注意多動行動が高いことが推察された。一方でコロナ禍前（2002年）の調査との比較においては、社会的スキルの使用や定着に変化はないものの、不注意多動や、引っ込み思案、攻撃行動などの問題行動については増加が見られると教諭が感じていることが推察された。

キーワード：幼児教育、コロナ禍、マスク保育、社会的スキル

1 問題と目的

2020年初頭から新型コロナウイルス感染症の影響を受け、感染対策の一つとしてマスクの着用が生活の中に浸透した。主に3歳児以上の幼児たちが集団生活を送る園でも、園や保護者の判断のもと保育中のマスク着用が日常化している。

マスク着用は、他者を感染させないため、自分を守るためのものでもあり新型コロナウイルス感染症の拡大防止には必要とされるが、筆者は保育現場に勤める中でコミュニケーションの発達や他者との信頼関係形成への悪影響を懸念してきた。園生活は、園児が他者と言葉でコミュニケーションする能力を獲得し、欲求、要求、感情、考え、経験や知識を、他者とやりとりをする中で高めることのできる集団生活の場である（小椋、2018）。実際に、幼児が初めて家族以外の人物と関わりを持つ出会いの場が、幼稚園や保育所、認

定こども園などであることも少なくない。保育者は、幼児たちとのコミュニケーションを常に近い場所から密に行う必要があり、子どもたち同士が他者とのコミュニケーションをとる機会を保障することも欠かすことができない。しかしながら、コロナ禍による感染防止予防対策として、社会的距離を取ることが求められるようになり、幼児教育の現場では十分な関りを持つことが難しい状況に陥っている。子どもは、視覚情報を活用してコミュニケーションが出来るようになるために、時間をかけて大人の口の動きを見て真似ることや、表情から相手の感情を読み取ることを学んでいく。他者の表情を読み取ることは、視覚的断崖実験（Gibson&Walk, 1960）からも明らかなように、他者の情動状態を推測し自らの行為を決定するといった社会的参照にもつながり、幼児にとって必要であり重要な機能である（堀、2022）。

1 九州ルーテル学院大学大学院修了生

本稿執筆時点の2023年には、新型コロナウイルス感染症は5類相当への分類変更がなされ、マスク着用は場面に応じた個人の判断に委ねられることとなった、しかし、さまざまな在園児が在籍する幼稚園や保育園では、今後も感染症予防のために、マスクを着用しての保育は継続されることが予想される。

七木田(2022)は、保育者のマスクの着用は予防対策という観点から見れば必要な対応であるが、子どもの健全な心身の発達を促す保育への影響については留意する必要があるとも指摘している。

本研究では、A県内の幼稚園、認定こども園において幼児教育に携わっている幼稚園教諭、保育教諭を対象とし、コロナ禍の保育活動における工夫や課題について、現状を質問紙調査で集約し、幼児教育に求められる工夫点や支援のあり方について考察していくこととした。さらに、園児の社会的スキルの定着の様子について、コロナ禍がどのように影響を与えたかについても明らかにしたいと考えた。

2 研究の方法

被調査者は、A県幼稚園、認定こども園に勤務する幼稚園教諭、保育教諭44名である。質問紙によるGoogleフォームを用いたアンケート調査を実施した。

質問した内容は、コロナ禍で変化している園生活における幼児の生活や、コミュニケーションの様子に関する質問、および幼児用社会的スキル尺度25項目(中台・金山2002)について選択回答を求めた。また、コロナ禍の現場における具体的な手立てについて、「マスク保育が幼児に与えた影響」「保育現場の感染対策」「コロナ禍の幼児の発達への印象」について自由記述で回答を求めた。選択回答項目についてはグラフ化して傾向を把握し考察した。自由記述項目については、記述を整理し要点を抽出したテキストデータを作成したのち、「WEBテキストマイニングツール」を使用して、単語の出現回数を分析した。

3 倫理的配慮

調査は無記名であり、回答の有無や内容については所属園には開示しないこと、また、回答は自由意思であり、回答の途中で中止することも可能であることを書面にて説明した。

4 結果と考察

(1) 回答者の属性について

本調査への回答(n=44)の属性を性別(表1)、職名(表2)、年数(表3)に示す。性別は女性が98%、男性が2%であった。職名は、幼稚園教諭が最も多く70%を占めた。

表1 回答者性別

性別	
男性	2
女性	42

表2 回答者役職

職名	
園長	3
主任	4
幼稚園教諭	31
保育教諭	4
その他	2

表3 回答者通算勤務年数

通算勤務年数	
3年未満	7
3～5年	8
6～10年	9
11～15年	7
15年以上	13

(2) マスク保育が幼児に与えた影響

マスク着用が日常化してきたことが幼児に与えた影響を把握するために、こども環境学会が2020年に実施した「コロナ禍状況の保育所・幼稚園・認定こども園における休園・登園自粛への対応とこどもたちへの影響に関する調査」を参考として質問を作成し、4件法で回答を求めた。その結果

表4 マスク保育が幼児に与えた影響

(n=44)	平均値	標準偏差	コロナ禍の変化
園児に新しい生活様式についての理解がある	3.57	0.55	100
園児の発話が聞き取れないことがある	3.02	0.73	98
マスクを着用していることで、園児の表情が読み取れないことがある	2.2	0.73	89
スキンシップの回数が減少した	2.14	0.73	87
園児に対して、保育中自分の言葉が伝わっているか不安になる	2.11	0.65	86
園児同士で、身振り手振りのコミュニケーションがみられる	1.89	0.65	75
園児同士のスキンシップが減少している	1.82	0.62	70
社会性の遅れを感じる	1.91	0.88	64
基本的生活習慣の遅れが見られる	1.84	0.86	61
運動面や身体的な活動に遅れがみられる	1.82	0.81	61
園児の言語発達の遅れを感じる	1.75	0.72	61
保育者のマスク姿に対して、戸惑う姿がみられる	1.23	0.42	23

から平均値と標準偏差を求めた。さらに「変化が全くない」と答えた場合を総回答から減じた数値を「コロナ禍の変化」とし、コロナ禍の変化が大きかった順に表4に示した。コロナ禍の変化をより多く回答者が感じていた順に整理すると「園児の新しい生活様式についてへの理解(100%)」「表情読み取りの難しさ(99%)」「発話の聞き取りの難しさ(98%)」「スキンシップの減少(87%)」「保育者の言葉が伝わっているか不安(86%)」「身振り手振りでのコミュニケーションがみられる(75%)」「園児同士のスキンシップが減少している(70%)」「社会性の遅れを感じる(64%)」「基

本的な生活習慣の遅れがある(61%)」「運動面・身体的な活動の遅れがある(61%)」「言語発達の遅れを感じる(61%)」「保育者のマスク姿に戸惑う(23%)」であった。

(3) 園児の社会的スキルの傾向

中台・金山(2002)の幼児用社会的スキル尺度を用いて、回答者が教育場で感じる園児の社会的スキルの程度について回答を求め、表5に示した。

本調査は、社会的スキル領域と問題行動領域に区分し、さらに「社会的スキル領域」を「主張ス

表5 園児の社会的スキル尺度

		平均値	標準偏差	
社会的スキル領域	主張スキル 平均 3.42	1自分から仲間との会話をしかける	3.66	0.83
		2友だちをいろいろな活動に誘う	3.89	0.72
		3不公平なルールには適切なやり方で疑問を唱える	2.86	1.15
		4簡単に友だちをつくる	3.48	0.88
		5不公平な扱いを受けたと感じたら、教師にそのことをうまく話す	3.25	0.97
	自己統制スキル 平均 2.81	6仲間とのいざこざ場面で、自分の気持ちをコントロールする	3.09	0.77
7仲間と対立したときには、自分の考えを変えて折り合いをつける		2.93	0.76	
8批判されても、気分を害さないで気持ちよくそれを受ける		2.52	0.82	
9仲間から嫌なことを言われても、適切に対応する		2.70	0.76	
協調スキル 平均 3.57	10言われなくても教師の手伝いをする	3.41	1.11	
	11教室での活動に自分から進んで仲間の手伝いをする	3.41	0.92	
	12園にある遊具や教材を片付ける	3.89	0.58	
問題行動領域	不注意・多動行動 平均 2.56	13不注意である	2.61	0.69
		14注意散漫である	2.59	0.76
		15そわそわしたり、落ち着きがない(多動である)	2.68	0.71
		16きまりや指示を守らない	2.39	0.54
	引っ込み思案行動 平均 2.05	17さびしそうにしている	2.07	0.79
		18仲間との遊びに参加しない	2.20	0.55
		19他の子どもたちと一緒にいると不安そうである	1.73	0.62
		20ひとり遊びをする	2.68	0.8
	攻撃行動 平均 2.12	21悲しそうであったり、ふさぎこんだりする	1.59	0.62
		22他の子どもがしている遊びや活動のじゃまをする	2.18	0.58
	23人や物に攻撃的である	2.00	0.75	
	24他の子どもと口論する	2.27	0.62	
	25かんしゃくもちである	2.05	0.61	

キル]、「自己統制スキル」、「協調スキル」の12問、「問題行動領域」を、「不注意・多動行動」、「引込み思案行動」、「攻撃行動」の3行動13問の回答を求めるものである。社会的スキル領域について、主張スキルは(平均3.42)、自己統制スキルは(平均2.81)、協調スキルは(平均3.57)、問題行動領域については不注意・多動行動は(平均2.56)、引込み思案行動は(平均2.05)、攻撃行動は(平均2.12)であった。

(4) マスク保育が幼児に与えた影響について

コロナ禍の影響について質問したところ、以下の3点が明らかになった。

まず、保育者は保育中、園児の表情が読み取れないことや発話が聞き取れない、自分の言葉が園児に伝わっているか不安になるなど、園児とのやり取りの場におけるコミュニケーションの難しさを感じている傾向が強いことがみられた。実際筆者の園でも、保育者の問いかけに園児が何度も聞き返してくる姿がみられ、その都度伝え直すなどしている。マスクで口元を覆われていると園児の表情が見分けにくいいため喜怒哀楽をとらえることが難しく、特に笑っているのか泣いているのかの判断が遅れ、対応に時間を要することもある。加えて、園児に保育者自身言葉が伝わっているかどうか、再度双方で確認をすることや板書するなど視覚情報を多く用いることで、お互いの誤解を減らすための工夫をしている。

また、園児同士も遊びや活動の中でスキンシップの関わりが減少傾向にある様子を保育者は感じていた。現場においても手を繋ぐことを躊躇する姿が見られ、自発的に離れて遊ぶ姿も見られている。一方でコミュニケーションの方法を工夫する様子が回答から窺われた。筆者の園においても、マスクによる表情の読み取りにくさを補うために、知らず知らずに大きく身振り手振りをういて会話をし、手をつなぐ際には玩具を介していたりする場面が見られている。保育者による工夫に加えて、園児自身もコロナ禍の状況に適応しようと工夫している姿を読み取ることが出来た。

園児への社会性や基本的生活習慣、運動面、言語面に関する発達の遅れについては、現段階での大きな影響を感じる保育者は少ないようだ。しか

し今後も、マスク着用が長期化すると予想される場合、園児の発達や発育に関する変化が見られると推測される。

(5) 対象とする園児の社会的スキルの傾向について
本尺度において、社会的スキル領域を主張スキル、自己統制スキル、協調スキルの3つに分け、各スキルに差があるかを調べるために統計的検定を行った。Levene 統計量は7.442で有意確率は <0.001 であり等分散性が仮定できなかったため、クラスカル・ウォリスの検定を行ったところ、自己統制スキルと主張スキル、自己統制スキルと協調スキル間に $p<0.01$ で有意差を認めた。このことから、今回の回答した保育者が関わっている園児の傾向として、適切に自己を主張したり協調的な行動をしたりする姿は比較的にみられるものの、自己統制行動の定着の弱さが予想された。

協調的な行動として多く挙げられた回答は、「園にある遊具や教材を片付ける」「言われなくても教師の手伝いをする」であった。筆者の園においても園児が自発的に環境を整えることや、保育者の手伝いにも意欲的な姿が見られることが多くこの結果を支持していると言える。

また、自己統制スキルの弱さも見られ、「批判されても気分を害さないで気持ちよくそれを受ける」ことなどについて難しさが見られるという回答が散見された。

一方、問題行動領域も不注意・多動行動、引込み思案行動、攻撃行動の3つに分け、各スキルに差があるかを調べるために統計的検定を行った。等分散性が確認されたため一元配置分散分析を採用した。その結果各スキルによる主効果が $p<0.01$ で有意であった。さらにどのスキルに差があるかを確認するためボンフェローニの多重比較を行ったところ不注意・多動行動と攻撃行動、不注意・多動行動と引込み思案行動間に $p<0.01$ で有意差を認めた。このことから、今回の回答した保育者が関わっている園児の傾向として、不注意多動行動が多く見られることが推測された。

園児の姿で不注意・多動行動として最も回答が高かったのは「そわそわする、落ち着きがない(多動である)」だった。問題行動として、不注意・多動行動は目立つものの、「仲間との遊びに参加

しない」「ひとり遊びをする」引っ込み思案な姿から消極的な様も見られる。

また、攻撃行動の記述には、「他の子どもがしている遊びや活動のじゃまをする」ことなど、園児が他者に対して衝動的な行動が問題行動として散見されることが挙げられた。

(6) コロナ禍における社会的スキルの変化について

表6に社会的スキル尺度について、本調査(2023)と中台・金山(2002)調査の比較を提示した。中台・金山調査において、各スキル得点はスキル内設問の平均値の合計で算出され、その合計が領域総得点となされていたため、本研究で得られたデータもそれに合わせて平均値の合計を算出した。

社会的スキル領域の本調査の総得点は平均(39.09)、中台・金山調査の総得点は平均(39.71)であった(図7)。主張スキル、自己統制スキル、協調スキルの3つの領域の比較をしても差は見られず、コロナ禍において生活様式の変化はあるものの、幼児の社会的スキルの発達については大きな変化はないことが伺われた。

一方で、問題行動領域の本調査の総得点の平均(29.40)と、中台・金山調査の総得点の平均(21.45)には差が見られ、本調査において高値であった(図8)。このことはコロナ禍において園児の行動の特徴に差異が現れ、不適切な行動が増加していることを示唆していると考えられる。

今回の調査から、保育者から見た園児の姿は、社会的スキルの発達に変化はないものの問題行動と印象付けられる行為が増加している傾向が認め

られた。

まず、社会的スキルの発達については、幼児の集団活動を重視する幼稚園や保育園の関わりが、コロナ禍においてもその低下を抑制する役割を果たしている可能性を示唆し、今後も園児同士、保育者と園児が関わり合いながら保育場面における社会的関わりを豊富に設定する価値を確認するこ

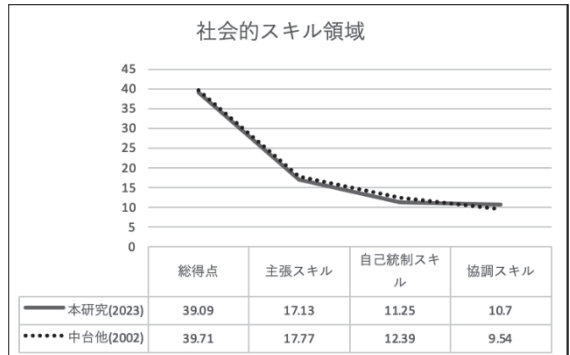


図7 社会的スキル領域得点 (中台他との比較)

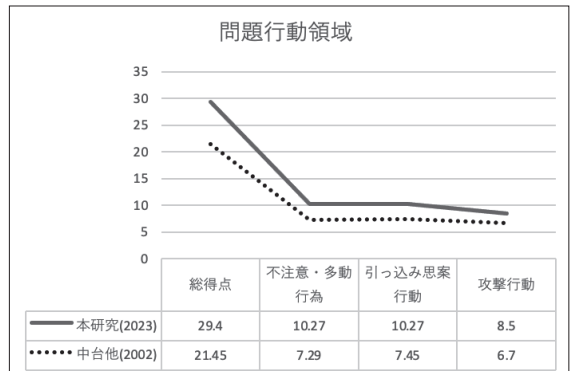


図8 問題行動領域得点 (中台他との比較)

表6 社会的スキル尺度のコロナ前後比較

		本調査(N=44)	中台・金山(2002)(N=198)
		平均	平均
社会的スキル領域	総得点	39.09	39.71
	主張スキル	17.13	17.77
	自己統制スキル	11.25	12.39
	協調スキル	10.70	9.54
問題行動領域	総得点	29.40	21.45
	不注意・多動行動	10.27	7.29
	引っ込み思案行動	10.27	7.45
	攻撃行動	8.50	6.70

とができた。

一方で、問題行動とみなされる行動は増加していることから、それぞれの園で取り組んでいる特別支援教育も含めた幼児教育をさらに充実し、環境の整備と保育者の関わりを含めた支援と、保育の質の向上を目指す必要性を感じた。

5 まとめ

今回の研究ではマスク保育が集団生活の場において、コロナ禍前とコロナ禍で見られる園児の姿にどのような影響が見られ、変化を感じているのか現場で働く保育者を対象にアンケートによる調査を行った。

マスク保育による影響として、「園児の表情が分かりにくいこと」、「聞き取りの困難によるコミュニケーションを取る際の難しさ」が多く挙げられ、結果として「保育者の言葉が伝わっているか確信が持てない」など不安な中で保育に従事している様子が見られた。一方で視覚的な情報提示を心がけるなど全ての園児にわかりやすい情報伝達方法の工夫も見られ、コロナ禍における保育の質の向上も感じられた。コロナ禍における社会的スキルの発達については、コロナ前に比べて自分の感情や行動をうまくコントロールする力や、不注意・多動行動の増加が見られ、幼児の行動の悪化が伺われた。一方で、園児の社会性や、基本的な生活習慣、運動面、言語面の変化は見られず、コロナ禍において保育者が工夫して取り組んだ成果の一つであると考えられた。園児との関係を丁寧に、構築してきた結果と言える。

思いがけない新型コロナウイルス感染症の拡大により、保育現場は混乱した。その中で保育者は様々な工夫や配慮をして、園児たちの安心と安全、環境を維持してきた。一方、行動面の懸念は残るものの、その中でも保育者たちの努力により園児たちに成長は見られている。今後、悪化している園児の行動を意識していくことで保育活動がより充実したものになることが期待される。

6 今後の課題

今回の研究では、A県内の一部の園が対象となる調査であったことから、さらに対象園を拡大し、園の立地条件などの条件で分類し比較検討が

必要と感じる。

今後、コロナ禍とコロナ禍以降の園児の発達の様子を、継続的に再調査していく必要も考えられた。

加えて、本研究における幼児の社会的スキルの変化は、先行研究後20年間の差異の比較であり、コロナ禍による影響のみを抽出しているものではないことに留意する必要がある。

7 謝辞

本論文は、2022年度九州ルーテル学院大学大学院人文学研究科学位論文、園田晃子（2022）「コロナ禍でマスク生活がもたらす幼児教育への影響—コロナ禍でもよりよい保育をめざして—」を加筆修正したものです。

アンケートにご協力いただいた全ての皆様に心から感謝いたします。

8 引用・参考文献

- 馬場訓子・梅本菜央・小林優香・横田咲樹・高橋敏之（2022）：幼児期における感染予防に関する研究の動向と課題 岡山大学教師教育開発センター紀要 第12号 pp403-416
 COVID-19による影響調査 比治山大学短期大学教職課程研究 7 167-175
 堀洋道（監修）・櫻井茂男・松井豊（編）（2018）：心理測定尺度集Ⅳ サイエンス社
 堀由里（2022）：幼児の感情理解に及ぼすマスクと音声の影響—コロナ禍の表情認知に対する試行的検討— 桜花学園大学保育学部研究紀要 第25号
 初塚真喜子（2010）：アタッチメント（愛着）理論から考える保育所保育のあり方 相愛大学人間発達学研究1-16
 こども環境学会（2020）：コロナ禍状況の保育所・幼稚園・認定こども園における休園・登園自粛への対応とこどもたちへの影響に関する調査 https://www.children-env.org/cabinets/cabinet_files/index/33/574c1bcca68e6719315033ae50d188a4?frame_id=39（2022年6月1日閲覧）
 松島英恵（2020）：新型コロナウイルス感染拡大予防対策下のカリキュラム・マネジメント—A 幼稚園5歳児クラスの実践を中心に— 新見国立大学紀要 第41巻 pp.71-78 2020
 松原耕平・新屋桃子・佐藤寛・高橋高人・佐藤正二（2019）：幼児期の社会的スキルと問題行

- 動が児童期の社会的スキルと抑うつに及ぼす影響 認知行動療法研究 第45巻 第1号
明和政子 (2022)：マスク社会が危ない 子どもの発達に「毎日マスク」はどう影響するか？ 宝島社新書
- 文部科学省・初等中等教育局・幼児教育課 (2021)：幼稚園等再開後の取組事例集
文部科学省・初等中等教育局・幼児教育課 (2021)：新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集
- 野井真吾・鹿野晶子・中島綾子・下里彩香・松本稜子 (2022)：子どもの“からだのおかしさ”に関する保育・教育現場の実感：「子どものからだの調査2020」の結果を基に 日本教育保健学会年報 第29号
- 野澤祥子・淀川裕美・菊岡里美・浅井幸子・遠藤利彦・秋田喜代美 (2020)：保育・幼児教育における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討 東京大学大学院教育学研究科紀要 第60巻
- 西館有沙 (2016)：マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識 人間発達科学部紀要 第10巻 第2号 125-130
- 及川智博 (2021)：COVID-19感染拡大下の保育者に困難感を生じさせていた要因の検討 — 有事下の葛藤にみる保育の質の保証— 名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科 社会保育実施研究 5巻 27-37
- 大内晶子・櫻井茂男 (2008)：幼児の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動の関する縦断的検討 筑波大学大学院人間総合研究科 教育心理学研究 第56巻 第3号
- 七木田方美 (2021)：保育者のマスク着用が保育や子どもに与える影響
- 下里里枝 (2022)：保育者のマスク着用が、子どものコミュニケーションに及ぼす影響について 関西国際大学教育総合研究所 教育総合研究叢書 15号 56-64
- 鈴木亜由美 (2003)：幼児の自己調整機能の注意ならびに認知的メカニズム：自己制御と自己主張の二側面から 京都大学大学院教育学研究科紀要 第49号 338-349
- 横井良憲・鈴木裕子 (2021)：新型コロナウイルス感染症 COVID-19の中での保育施設の課題 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 第6号 pp19-26

(2024.1.26受稿 2024.2.22受理)

The impact of wearing mask on early childhood education during the coronavirus pandemic

– Aiming for better childcare even during the coronavirus pandemic –

Akiko SONODA, Toshinobu MASUMOTO

This study collected and examined the opinions of kindergarten and childcare teachers (hereafter referred to as “teachers”) through a questionnaire survey regarding issues and innovations in childcare activities and trends in the social skills of children in the Corona Disaster. The effects of masked childcare included difficulty in reading facial expressions and listening to speech, decreased physical contact, and anxiety about whether the words of the caregivers were being understood. In response to these issues, the teachers at the site confirmed the understanding between teachers and between teachers and preschoolers, tried to present information visually (e.g., by using the board), made gestures to make them easier to understand, and used toys to hold hands. Regarding to the preschoolers’ social skill, the results of the present survey showed that they tended to have weak self-control behavior and high inattentive hyperactivity behavior. Although there was no change in the use and retention of social skills compared to the pre-Corona Disaster survey, the present results also suggested that teachers felt that there was an increase in inattentive hyperactivity and problem behaviors such as withdrawn and aggressive behavior.

Key words: Early Childhood Education, Corona Disaster, Masked Childcare, Social Skills